レオが家で寂しくしていたところに、クルミとシュウが遊びに来た。

クルミ達は、たまにこの部屋にやってくるレオの仲間だ。

しかし、この日はクルミの穏やかでないセリフで始まった。

「ここに居たら殺されてしまう。私たちと一緒に逃げましょう」

それを聞いたレオはその話を笑い飛ばすかのように言う。

「まさか。何言ってるの？ そんな事言われても僕はここを出れないし、出たところで生活できない。野垂れ死にするだけだよ」

レオは、この部屋から出たことがない。

ご飯は何もしなくても貰えるし退屈しないように遊び道具もある。

首には立派なリボンもつけてもらっているし、何不自由ない。誰が見てもここの家主に可愛がられている生活をしている。

しかしそれは少しばかり窮屈な生活でもある。

レオは外で仲間達と気軽に遊び、冒険をしてみたい気持ちはあるが自分が居なくなれば家主は悲しむであろうと考えると、本気で出ようと思ったこともなかった。

「本当なのよ……！ 貴方には私たちついているじゃない。安心して来て欲しい」

クルミはそれをわかっていながら尚、説得を試みる。

クルミたちは、最近この部屋に出入りしている男性が近所でまだ幼い仲間の首を絞め殺していた現場を目撃し、その出来事をレオに話した。

「でも、本当にそんな事するような人には見えないよ。優しくていい人だ」

そんなレオに、シュウは憎悪を込め吐き捨てるよう言った。

「信じたくない気持ちはわかる。でも事実、子供は殺されていたんだ。そして『次は本番だ』って言ってたんだ。……俺にはレオを殺す為の実験としか思えなかった」

クルミは懇願した。

「貴方に死んで欲しくないの。お願い一緒に来て」

そのあまりの真剣さに、レオは少し事態を重くとらえ始めた。

レオから見てその男性は、美味しいおやつをくれたりするいい人である。

可愛がって貰っているとも感じているし、ましてやその人に殺されるなんて信じ難い話。

しかし、クルミとシュウは自由だが、その分外で過酷な生活を強いられている。

なかなか食べものにありつけず、空腹の中探し回る日だってしょっちゅうだ。

レオは、そんなクルミ達に遊びに来た時にご飯を分け与えていたりしていた。

そのご飯はクルミたちにとって生命線なはず。

自分がここを出れば、その命もなくなるし、一緒に行動するとなれば、食いぶちは減る。

そんな嘘をついてまでレオをここから出すメリットは一つもなく、理由がない。

レオは少し混乱し始めた。

そんな時に、シュウがいきなり「おいクルミ、帰るぞ！」と声を上げた。

どうやら、家主が帰ってくる気配を察したらしい。

以前部屋に出入りしていることが見つかり、捕まったクルミは手術されお腹に傷がついた。

それ以来すっかりトラウマでクルミはシュウのその言葉を聞くと、一目散に部屋の出入りをしている小窓向かいすぐ外に出た。

「……明日また来るからな。考えておいてくれ」

少し遅れてシュウも小窓に足をかけ、レオにそう言い残し、去った。

そしてすぐ、家主は部屋にやってきた。

「ただいまー」

「おかえりなさい」

レオは何事も無かったかのようにそう言い、主人にすり寄り甘えた。

「どうしたのレオ～？　ニャーニャー言って。ごはんかな？」

家主は嬉しそうに、お皿にご飯を入れた。

お腹が空いていたわけではないが、折角入れてくれたのでお皿に近づきレオは一口食べる。

その姿を愛おしく見つめていた家主だったが、玄関のチャイムが鳴ったので、慌てて玄関に向かいドアを開けると、そこには先程クルミ達が存在を杞憂した男性が立っていた。

部屋に招かれ、男はレオに近づいて「これ、お土産だよ」と、お皿の横に缶詰を置いた。

「レオの為にいつもありがとうね」

家主は男性にお礼を言うと男は腰のあたりに腕を絡ませるようにしながら言った。

「愛する梨乃の宝物は俺にとっても大切だから当然の事だよ」

「……大好き」

家主は男に抱きつきながらその言葉を口にしていた。

レオはやはりこの男性が子供を殺し、自分まで殺そうとかしているなんて思えず、それはクルミ達の見間違えで、違う人だったのではないかと思った。

明日、クルミ達がきたら言ってやろう。

そう思いながらレオは二人の邪魔をしないように静かにその場から離れ寝床に戻り静かに眠りについた。

抱き締められていた梨乃は「あー……また」と床で何かを見つけたようで男から離れしゃがみ込み何かを拾った。

それは猫の毛。

レオの毛でなく、クルミの灰色汚れた短い毛であった。それを見るなり梨乃は

「まったトイレの扉からあの猫が来たのね。もう本当に最悪なんだけど」

嫌そうな顔をした。

「だったら閉めておけばいいんじゃないのか？」

「閉め切った部屋に居るなんてレオが可哀想じゃない。でも家にいないときに開けていても大丈夫な窓ってここの窓だけだもの。こうやって違う猫が来るなら何か違う方法を考えなきゃダメかしらね」

男の言葉に、梨乃は困ったような声をあげた。

「レオの友達が遊びに来るくらいいいんじゃないのか？」

「嫌よ。私猫が好きじゃないし。レオじゃなきゃダメなの。まぁメス猫はこの間捕まえて避妊手術したけど。野良にレオの子供なんて産ませたくないし」

梨乃は顔をゆがませながら言った。

「そうか。梨乃はレオが大事なんだな」

「えぇ。あの子は宝物だっていつも言ってるでしょう？」

「そうだったな。俺の宝物は梨乃なんだけどなぁ」

男性は梨乃を優しい眼で見つめた後甘く囁いた後、首に噛みついた。

「うん……あ。ダメぇ。私明日も仕事なの」

「俺休みなんだけどなぁ……泊ってっちゃダメ？」

「ダメ」

男性は梨乃と甘い時間を過ごしたあと帰っていった。

◇

次の日、宣言通りシュウが部屋に遊びに来たが、その表情は暗かった。

「あれ？　クルミは？　後から来るの？」

レオはいつも一緒に来るはずのクルミが居ない事に疑問を投げかける。

「……死んだ」

「え!? 何言ってるの？ だって昨日は……」

すると、想像もつかなかった答えにレオは動揺していると、シュウは強い口調で声をかぶせた。

「殺されたんだよ！　あの男に……！」

「嘘……でしょ？」

信じられず悲痛な声をあげたレオ。

「……ついさっきの出来事だ。ここに来る時にまたあの男にあった。逃げようと走ったんだけどクルミが逃げ遅れて……首を絞められて死んだ」

「嘘だよね？　僕をからかってるだけでしょ？」

「嘘でこんな事言うかよ。流石にあの男もここにまで来れなかったみたいだけど、まだこの近くにいる。捕まればきっと俺も殺される。暫くここで匿ってくれないか？　……って言ってもお前の主人に見つかれば保健所行きだ。どのみち死ぬ運命か……」

シュウは自虐的に笑うしかなかった。

一方のレオは昨日自分の身を案じてくれたクルミが死んだという事にショックを隠し切れなかった。

あの男が殺したというのであれば、それはここに来てくれようとしたから自分のせい。

それだけじゃない。僕に関わってしまったからクルミは傷つけられ、すっかり主人の事は苦手になった。

それでもクルミは自分のところに来てくれていたのに。

自分はクルミに何もしてやれなかった。だったらせめて――。

「僕はここから出るよ」

最後の望みだけでも叶えてあげようと思った。

「ほんとにここから出て……大丈夫なのかよ」

それは今ここを出る事への不安の表れもあったが、昨日、殺されると言われても尚、猫としては珍しい程の忠誠心から拒んでいた筈なのに、いざ『ここを出る』と言われ、戸惑いを隠せずにいた。

「僕がその窓から脱走した事が知られれば、きっと二度とあの窓は開けてもらえない。そこが開けられなくなったらシュウ達も来れなくなる。それが嫌だったからしなかったのもあるんだよ」

レオは少し照れくさそうにそう言った。

「そう……だったのかよ」

シュウは今までレオは、この安心な生活を手放せない臆病な気持ちから言っていると思っていただけに、自分達に会えないのが嫌だとそんな考えがある事を知り、照れくささを感じていた。

レオは笑い、窓から飛び出た。

決意が鈍る前に行動に移したかったのだ。

「シュウも早く」

「……あ、おい！　待てよ！」

シュウもすぐそれに続いた。

出てすぐある塀の上を歩いていくと家の横でタバコを吸い、まるで待ち伏せするかのようにたたずむ例の男性を発見した。

更にその男性近くには、一ミリも動かないクルミの姿もあった。

「……本当に、クルミは殺されたんだ」

シュウを信じていなかったわけではないが、実際にそれを目にした事でレオは思わず固唾をのんだ。

「あいつ、いつの間にこんな近くに……しかもクルミもつれて」

シュウはレオに厳しい表情を向ける。

「やっぱり僕はクルミにもう来るなと言うべきだったのかな」

レオはクルミの亡骸を見つめ悲しみがこみ上げていた。

主人がクルミを良く思っていない事をレオは知っていた。

きっと男性は主人の為に、クルミを殺したのだろう。

知っていながら、自分が寂しいからと甘えていた事を今心の底から悔いていた。

いくら嫌いだと言っても殺されるなんて思っていなかった。

人間がそんなにひどい生き物だと知らなかった。

レオは人間に甘やかされる事しかなかったからから。

「言っていてもクルミは来たと思うぜ。お前の事大好きだったからな」

そんなレオにシュウは励ますように言った。

その時であった。

男性はタバコを吸い終え、気配を感じ視線を送るとレオと目が合った。

「出てきたかクソ猫」

レオはこの男性が仲間を殺す酷い奴だという事は理解した。

そして、このままではシュウも殺されると思った。

「シュウ、逃げて。僕があの人所に行っている間に」

「おい、なんでだよ？」

その申し出にシュウは首を傾げた。

「あの人に捕まったならきっとまた部屋に戻してもらえるよ」

「俺、昨日お前も殺されるぞって言わなかったか？　お前は、あいつを信じるのか？」

シュウは釈然としないという顔で睨む。

「ううん。どっちも信じてる。どっちも信じてるからこそ、そうする。シュウはもう僕の心配何てしてないで、自分の事だけ考えてよ」

何を信じればいいかなんて、レオにはわからなかった。

だけど、あの人が自分を殺そうとしている事もあり得ないという感覚も信じる事にした。

シュウと自分が逃げたら、きっと男性は自分を捕まえて保護する方を選ぶはずだ。

「シュウは僕にとって大切な友達だ。僕にもう関わっちゃだめだ。逃げきれたらもうここには来ない。約束してね。今までありがとう」

レオは、シュウの言葉を待たずに男の元に飛び出した。

「あ！　おい！……クソッタレ！」

レオの勝手な行動にシュウは怒りを覚え今すぐ追いかけたい気持ちで一杯だったがここで追いかけたら自分も捕まってしまう。捕まったら殺される。

その言葉を信じ、言われた通りに反対方向に逃げるしかなかった。

「……レオ！」

男性は一瞬シュウみたが、レオを追いかけた。

レオは自分の思った通りに追いかけてもらえたことに安心しつつ、シュウの安全を願った、後は少し追いかけっして時間を稼いだ後、クルミの横で立ち止まり自ら捕まった。

「お前まで一緒に逃げてきたのか。ダメじゃないか」

男性はレオを抱っこしながら話しかけた。

「ごめんなさい」

「はは、その鳴き声はごめんなさいってところか？ お前の主人が悲しむぞ」

レオはその優しい声にその手でクルミが殺されたなんて事信じたくなかった。

でも横たわっていたクルミの姿はそれを証明している。

「許さないぞぉ。本当にお前の主人はお前が可愛いらしいからな」

男性はそういった後、急に声色を変えた。

「お前のせいで俺が一番になれない」

「……え？」

男性の急変した態度に困惑した。

「梨乃の愛情を奪うお前がずっと憎かった。まさかお前が部屋から出てくるなんてな。それで捕まってくれるなんてこの死骸持ってきて正解だったか！

最近は猫そのものが憎くて見つける度に殺していたけど、そんな生活も今日で終われるみたいだ」

男性はニコニコしながらレオの首に手を持ってきた。

「嘘……」

自分は愛されているのではなく、憎まれていた。

そして、自分のせいで罪なき仲間が殺された。

自分は大丈夫なんてとんだ自惚れだったらしい。

――昨日の話は本当だったんだ。

昨日、クルミの言うことを信じて逃げていればクルミは死ななかった。

今日、この人のことをもっと疑っていれば自分は――。

「これで、梨乃は俺だけのものだ」

レオはクルミの姿を見つめながら悲鳴をあげた。

◇

「レオ……どうして」

仕事から帰ってきた梨乃はレオが逃げたということに絶望し男性に「一緒に探してほしい」と電話をした。

「大丈夫。すぐ見つかるさ」

男は白々しく慰めの言葉を口にした。

しかしそれが気に触ったようで梨乃は声を荒らげる。

「レオは……。レオはオスの三毛猫だったの。知ってる？オスの三毛猫って凄く貴重なの高値で取引されるわ。あの子を価値を知る人が保護したのならきっともう手放さない」

「こ……高額だって?! なんでそんな猫をあんないつでも逃げれるようにしたんだよ」

男はレオにそんな価値があるなんて知らず大声を出す。

ましてやあんな普通に脱走出来るようにしといて何を言っているのだろうと驚いた。

「……欲しい人は一千万出しても欲しいって人いるらしいわよ……。

何故かしらね。あの子は逃げない変な自信があったのよね……。今思うと変な根拠」

男はその信じられない金額に、レオは梨乃の前から消えれば別に良かった。殺さずに売ればすごい金になったのに。その後悔が募り気が動転して思わず口にしてしまった。

「俺はなんてことを……」

思わず口を塞ぐがもう遅い。その言葉は梨乃の耳に届く

「……貴方、あの子になにかした？」

「あ、いや……」

目を泳がく男に梨乃は詰め寄る。

「私は美しい三毛猫にレオの子供を産ませて、今度はオスの三毛猫を売ってより高額なお金を手にすることだって出来たかも知れないのに……ねぇ、どうしてくれるの？」

梨乃は目線を合わせない男にため息をついたあと、携帯を操作して画面を見せながら笑顔で言った。

「まぁ……いいわ。その件は追求しない代わりにこのミケのオス猫私に買って頂戴。嫌なら訴えるわよ」

そこには【三毛猫オス 1000万円】と書いてあり男は目を疑う。

男は、猫がいなくなり落ち込んでいるところを慰め、そして後に自分がいれば猫なんていらない。そうなると思ってやった事なのにこれはなんだ？

何故落ち込まない？

何故自分は今脅されている？

「いや、また猫を飼うのもバカバカしいわね。それに一千万も一括で普通に考えて払うのも無理か……。

今ある貴方の貯金全部と、その後毎月決まった金額私に払うって事で手を打ってあげる」

レオが宝物とは、宝物のように大事だと言うことだと思っていた。

しかし、梨乃はレオの事を金銭的価値で宝物だと言っていたのだ。

こうして今お金の要求をされている状況に、自分の価値はお金以下であったことを知る。

自分のしたことは一体……。

男は自分の愚かさを呪っていた。